

ナダールの肖像写真

ナダールは多彩な才能の持ち主で、ジャーナリストとして出発し、次に新聞や雑誌に当時の世相をいきいきとらえた風刺画を発表して名を上げます。一八五二年頃から、二百八十六人の文学者、ジャーナリストが一つの画面に集合する大石版画「パンテオン・ナダール」の制作を開始しますが、その下絵を描くため写真を使ったのをきっかけにして、この新技術にのめりこんでいきます。そしてついに一八五四年にパリ、サン・ラザール街に写真スタジオを開業して、プロの肖像写真家になってしまいました。

代表作をいくつか見ていただきます。詩人のシャルル・ボードレール（第二室の扉ページ、21）と

②—フェリックス・ナダール「ジョルジュ・サンド」（一八六四）



作家のジョルジュ・サンド（22）、どちらもフランス第二帝政期を代表する人物です。ナダールは若い頃から当時の著名な文化人、政治家などと広くつきあいがあって、彼のスタジオは一種のサロンと化していました。ナダールのスタジオでポートレイトを撮影することが、有名人であることの証明とされていたといわれています。

注目すべきは、彼の撮影の方法で、全身写真がほとんどだった当時の名刺判写真とは違って、たいいていこのように半身、あるいは四分の三身像で撮影しています。またごてごてした小道具や装飾的な背景画は、ほとんど用いられません。人物は黒、または灰色のシンプルな布を背にして、レンブラントの肖像画を思わせるドラマチックな光によって浮かびあがってきます。その結果として、写真を見る者の視線は、モデルの顔に集中することになります。

このような撮影法によって強く印象づけられるのはモデル自身の卓越した個性です。つまり同じ顔でも、名刺判写真のようにモデルの社会的地位や職業のような表層的な視覚情報を示すのではなく、ナダールのポートレイトは「人物の隠された内面を映し出す鏡」として機能しはじめるわけです。たしかにボードレールやジョルジュ・サンドの肖像を見ると、彼らの独特な性格や個性が伝わってくるような気がしますね。ボードレールなど、いかにも自意識過剰で神経質そうな詩人の風貌です。サンドも堂々とした男まじりの性格をあらわにしています。ナダールが発見したのは、このような内面と外観とを統合する回路だったといえます。その後、彼が確立したモデルの個性（内面性）を定着するといふポートレイトの基本的な原理は、ずっと長く写真家たちを支配し続けることになる。その呪縛はいまだに続いているといつてよいでしょう。